



## ネバーランド

小田沙也加

(愛知)

荒波のごとき毛布に溺れたまま行方不明の右の靴下

大学院またの名をネバーランド好奇心だけで空が飛べたら

自転車のペダルに反乱された日の引っかけ傷は真一文字に

カフェラテの泡一斉にはじけだしお告げのように採択通知

行き当たりばったりさすらう鳩たちに道を譲れば西日のぬくさ

ラウワンのダーツのコツを知っている真面目な人の不真面目な過去

逆光に浮き立つそばかす光から生まれたそれは光の味方

友人の猫に懷かれた午後よ許しとは柔らかいまなざし

報酬は極細ポツキー後輩に実験装置のレクチャーをする

実験の問題点を挙げながら剥けばりんごの皮の分厚さ

暴かれる気持ちはどうだこの地球<sup>ほし</sup>の四十六億年の脈動

キラウエアの噴火ビデオを巻き戻せば火口にぎゅんと吸われるマグマ

鉄塔の怪しい赤に見張られてタスクの残る身のまま帰る

流れ着くための舵など分からない高層ビルの灯りが遙か

結局はフィジカルが解決するさ頭でつかちのマフィンをかじる

このごろの私  
卒業に向け、修士論文を書  
いている。火山のマグマが研  
究対象だ。研究は予想がつか  
ないことの連続だが、そんな  
毎日楽しい。春からは博士  
後期課程に進学する。研究と  
短歌の両立が目標だ。



## Cherry Bonica

松下誠一

(東京)

このごろの私

十一月上旬、誘われて花を見に行くのは初めてだった。十七歳から始めた短歌が現在まで続いて、それがいつまで続けられるか分からないけど、それでも気持ち込めてやっていきたいと思います。

学生の身分に未だあることを恥じながら学割は効かせる

庭園のマップを持たぬままきみが選んだ右の道からまわる

声のトーンが気に入らなくて言いなおす 群れて咲くツワブキのその色

暗々とした水中に揺らめける鯉を見るときいつも背の側

カルガモの動きに波のあらわれて落ち葉はふちへ流されていく

かすかなる潔癖にあり手を洗うあいだチャノキを見るきみを見る

一品種ごとに注釈などあつてチェリー・ボニカの〈開花時の微香〉

秋薔薇の香りに顔を近づけてきみも近づくから近かった

チェリー・ボニカの色素の濃さを言うきみの存在にいまいっぱいになる

笑おうと思えばできてハルニレの仄かな影に体のふたつ

温室に曇るメガネを拭い一つ順路のくねりくねりしている

昼咲きと夜咲きのあるスイレンのどれもが咲かずあるようだけど

なめらかな喉元に日の差しながらまた秋薔薇を見に来られたら

手をつなぐことなくきみを見送って東口から上に戻った

炎踏めばそのゆらめきが手に入ると信じてしばし落ち葉を踏んだ